

50周年を迎えて(2)

「私と大和文華館」

－ 矢 代 先 生 の 想 い 出 －

大和文華館 前館次長 成瀬不二雄

私は兵庫県下唯一の国立大学である神戸大学文学部の出身なので、主任の小林太市郎先生に可愛がられ、いずれは先生の後任になれるものと思っていた。ところが私は急に他の方面に就職しなければならないことになり、小林先生のお世話で奈良市の大和文華館館長の矢代幸雄先生へ紹介され、以後39年にわたり職にとどまることができた。私が大和文華館で最も印象に残っているのは、当時館長をつとめておられた矢代幸雄先生のことである。

言うまでもなく、矢代先生は美術界に広く通ずる顔を持っておられた。先生が私に注意されたことは、「君はある分野を研究しようと思ったとき、その分野をすっかり見なくては駄目だよ」という忠告であった。実物をよく見ることは、美術史研究の初歩であるが、

私はその後に秋田蘭画から司馬江漢へと移る日本近世絵画史の潮流の研究へと進んだが、「すっかり見るんだよ」という矢代先生の声はいまだに私の耳に残っている。言うまでもなく、古美術から近代美術にわたり、矢代先生のように広く鑑賞した学者はいないであろうが、先生はご自分の忠告をすべて実践されたと言うことができるであろう。

個人的には、先生は動物の猫が好きな優しい老人であった。先生を拙宅にお招きしたとき、私たち夫婦の飼い猫が、当時まだ元気であった私の老母が止めるにもかかわらず、先生の膝の上に安居してしまったほどである。

近く大和文華館は改装されるそうであるが、この機会に光線が明るく入りすぎるといふ欠点が改善されることを願っている。



昭和60年、開館25周年式典。右から佐伯勇会長、筆者、吉川逸治館長、山根有三東大名誉教授、吉川館長夫人。



昭和60年、館次長の筆者と、昭和55年、担当の「富士の絵」図録表紙



昭和35年、開館記念式典。高松宮同妃殿下と矢代幸雄館長



司馬江漢
「七里ヶ浜図」
(大和文華館蔵)

季刊 美のたより No.169

平成22年3月10日

発行 大和文華館